粉　河　税　務　署　長　賞

めぐりめぐって命を救う

和歌山県立紀北工業高等学校　三年　田中　鈴乃

今年の夏、母が熱中症で倒れた。近年地球温暖化により、最高気温が更新され続け、毎年ニュース番組で「十年に一度の猛暑」という謳い文句を聞く始末だ。そんな息もできないような、むせ返る様な暑さの六月、母が熱中症になった。

私の家は農業をやっている。この時期は桃。屋外作業から帰って来てお昼を食べて、数時間が経ったころ、息を荒くした母が、二階にいた私に「ちょっと来て！救急車呼んだ」。と、私は急いで階段をかけ下りて母の元へ向った。そこには過呼吸を起こしている母の姿があった。救急車は、同じ部屋にいた妹が呼んでくれた様だった。クーラーは効いている部屋であったがものすごく苦しそうな様子に私も不安になりながら、救急車の到着を待った。

ものすごく長く感じた。最初に倒れたと書いたが意識はあったが、体に熱がこもってどうしようもなくあがいている姿は、このまま死んでしまうんじゃないかとすら思える緊張が私の脳をぐるぐるとかけめぐっていた。

そんな中、救急車の音が耳に入った。救命士の方が来てくれたことで少しだけ心を落ちつけることが出来た。妹には家にいてもらって、姉である私が病院までついて行くことになった。人生で初めて救急車に乗った。車内は暑かった。まさかクーラーが効いていないとは思わなかった母も部屋にいた時よりも苦しそうだ。車内の温度に若干の不安を感じたが、無事近くの病院へ救急搬送された。点滴中息苦しそうだった呼吸が徐々に落ちついて行き、点滴が終わったころには、やつれてはいたが私と平常時の様に会話が出来る所まで回復した。その後二～三週間はやはり、体温の調節が上手くいかず調子が振るわない様子であった。

もし、もっと無理して農作業をしていたら、もし、救急車が遅かったら、重症化して、身体に麻痺が残ったり、命を落とす未来だってありえた。母の命を救ったのは、母の判断の早さと、救急救命士の方たち、病院の方たちなどさまざまな人の手で人の命は救われるのだとわかった。

そしてそこには第三者の手もある。救急車の費用は税金によって賄われている。救急車が一回出動するのにおおよそ四万五千円がかかると言われている。これが税金によって賄われていなければ、呼ぶのに躊躇する。

実際海外では救急車が有料で、医療費も割高な国や州もある。私はいままで税をぼんやりとしか捉えていなかった。徴収されるばかりで何にどう使われているのかを捉えられていなかったのだ。それがこの出来事があったことで税金によってめぐりめぐって人の命を助け救うことがあるのだと強固に実感した。

税金が循環していき私たちを助けてくれる。普段は透明に見えてもたしかにそこにあるのだと大きな実感を伴い私の目の前にあらわれました。